

附属山口小学校 1年生のフリートークにおける経験と教師の役割

～幼小接続の視点もふまえて～

中島 寿子^{*1}・志賀 直美^{*2}・大森 洋子^{*3}・高田 和宜^{*3}

First Graders' Experience and Teacher's Role in "Free-Talk" Activities
at Yamaguchi Elementary School Affiliated with the Faculty of Education, Yamaguchi University:
from View of Smooth Connecting from Kindergarten to Elementary School

NAKASHIMA Hisako ^{*1}, SHIGA Naomi ^{*2}, OHMORI Yoko ^{*3}, TAKATA Kazuyoshi ^{*3}

(Received August 5, 2019)

キーワード：フリートーク、小学1年生、朝の会、幼小接続

はじめに

附属山口小学校では朝の会でフリートークを行なっている。フリートークは「話題に沿って子どもが自分の考えを述べ合う話し合い活動」であり、「話す力、聴く力、話し合う力を育てる話し合い活動と思われがち」だが、第一義は『「分かり合い、支え合う」仲間関係をつくること』にあり、「仲間の考えを共感したり、仲間のよさを感じたりすることができる子どもを育てていきたい」という願いがあるという¹⁾。

附属幼稚園の帰りの集まりでも、子どもたちが「お話したいこと」を話したり、自分が作ったり見つけたものを「紹介」したい時には、そのための時間を設けている^{2) 3)}。そのため、附属幼稚園から附属山口小学校に入学した子どもは、フリートークの中で幼稚園での経験をいかしていると考えられる。

2018年4月に附属幼稚園での保育経験もある志賀直美教諭が附属山口小学校赴任された。そこで、本プロジェクトでは志賀教諭が担任する1年生のクラスにおけるフリートークの実践を取り上げ、フリートークにおける子どもたちの経験や教師の役割について幼小接続の視点もふまえながら検討したいと考えた。

1. 研究の目的

附属幼稚園での保育経験がある教師が担任する附属山口小学校1年生のクラスを取り上げ、朝の会でのフリートークの実践について以下の点から検討する。

○子どもたちはフリートークでどのような経験をしているのか

附属幼稚園から入学した子どもたちは、幼稚園での経験をどのようにいかしているのか

○教師は子どもたちの実態をどのようにとらえ、何を願い、どのような支援を行なうのか

そこには附属幼稚園での保育経験がどのようにいかされているのか

2. 研究の方法

2-1 対象クラス

志賀教諭が担任する1年2組。男児18名、女児17名、計35名。

2-2 観察の方法

2018年度5月から3月まで、中島が対象クラスの朝の会を観察し、文字記録とデジタルカメラによる写真・

*1 山口大学教育学部幼児教育コース *2 山口大学教育学部附属山口小学校 *3 山口大学教育学部附属幼稚園

映像での記録を行なった（計 50 回）。映像記録をもとに、子どもや教師の発言を文字記録にもまとめた。

2-3 記録をもとにした討議

映像記録や文字記録をもとに、志賀教諭・中島で討議の機会を設けた。子どもたちの多くについて保育経験があり、1年生との交流活動も行なってきた附属幼稚園大森教諭・高田教諭とも討議する機会を設けた。

2-4 他大学の附属小学校の参観

朝の会を大切にしてきた歴史があり、幼小一貫教育カリキュラムもある奈良女子大学附属小学校学習研究発表会にも参加した。1年生のクラスの朝の会と学習を参観し、その後の協議会にも参加した。

3. 結果と考察

3-1 1年間の流れ

対象クラスでの朝の会の話し合い活動は、Ⅲ期に分けられた。附属山口小学校で従来行なわれている形でのフリートークを始めたのは、夏休み明けからであった（表 1 参照）。

表 1 1年間の流れ

【Ⅰ期】 4月～6月	健康観察時に日直が決めた話題について全員が話す
【Ⅱ期】 7月（夏休み前まで）	クイズトーク
【Ⅲ期】 8月30日（夏休み明け）～3月	フリートーク

以下、中島の観察記録、討議における志賀教諭の話をもとに1年間の実践をまとめ、子どもたちがどのような経験をしているのか、教師が子どもたちの実態をどのようにとらえ、何を願い、どのような支援を行なっているのかを検討していく。志賀教諭をS、中島をNと表記する。子どもたちもアルファベットで表記する（例：男児18名は大文字でA男からR男、女児17名は小文字でa子からq子）。紙幅の都合により、いずれの実践もその一部のみを取り上げる。

3-2 【Ⅰ期】健康観察時に日直が決めた話題について全員が話す

Sは「入学当初の子どもたちはまだフリートークをする段階にない」と理解しており、朝の会では健康観察時に自分が提供した話題について全員が話すようにしていた。すると、すぐに「〇〇のことを言いたい」と言う子どもが現れたので、その日の日直二名が決めるようにした。この活動には、子どもたちが「自分の存在を友達に知らせる」「いろいろな友達の存在を知る」ことで互いに知り合い仲良くなれるように、「全員が話したいことがあり、話せる場を作れるように」という願いがあった。また、今後フリートークに取り組むことも見通して、「自分の生活を振り返って話題を探す」「二人で一つの話題を決める（友達と意見を合わせる）」「話題によって面白さが違うことを体感する」経験ができるようにという願いもあった。

具体的には以下のように進めていた。

- 日直2名が何の話をしたか話題を決める。
- Sから名前を呼ばれ、「はい、元気です」等答え、日直が決めた話題についても話をする。
- 最後にS、「トラチャン」も答え、話をする。

「トラチャン」は手を入れて動かせるトラの人形である（写真1）。Sは子どもたちが安心して小学校生活をスタートできるように、入学式の日にはトラチャンを紹介し、「失敗したからこそ分かること、できることがある」「トラブルをチャンスにしていこう」と伝え、「トラブル（しっばい）をチャンスに」というポスター（写真2）も掲示した。当初はSがトラチャンを手にして話題について話していたが、次第にやりたい子どもが前に出てトラチャンを手にして話すことを楽しむようになった。Sはクラスの中で困ったことが起きるたびに、「失敗してもいいんだよ」「どうするとよいかみんなで考えよう」と一緒に考えることを大切にしており、次第に子どもたちからも「そういう時は」「トラチャン」という言葉が聞かれるようになっていった。Sは「子どもの困り感からやさしさが生まれる」とも考えており、「〇〇ちゃんが困っているの、

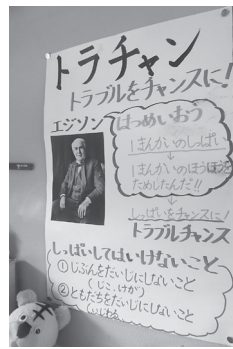
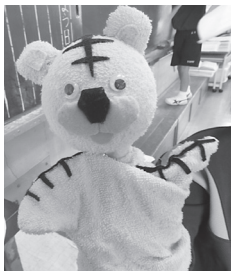


写真1「トラチャン」 写真2「トラブルをチャンスに！」

表2 健康観察時に話した話題（一部）

日にち	話題
5月25日(金)	すきな人
5月30日(水)	大きくなったら何になりたい
6月6日(水)	きれいな果物
6月12日(火)	すきな本
6月19日(火)	すきな虫
6月25日(月)	お休みの日のこと

わかる?」「みんなで助けてあげて」「どうすればいい?」と問いかけて一緒に考えることも大切にしていた(表5-2参照)。時間がかかっても入学当初の時期に仲間づくりの基礎を作っておけば、その後の子どもたちは伸び、学び合う関係になるとSは考えていた。

子どもたちが考えた話題の一部を表2にまとめた。Sは「理由を聞くと、友達のことがもっとよくわかる」経験をしてほしいとも願っており、国語で「わけをいおう」を学習した頃に一人目の子どもに理由を聞いてみると答えたため、その後の子どもにも聞くようにした。理由を言葉にすることは子どもにとって難しいことも多いようで、「わけはありません」と言うこともあったが、次第に理由も合わせて自分の考えを話す子どもが増えていった(表3①)。また、子どもがSよりも先に友だちの名前を呼ぶ姿を見て、Sが「みんなで呼んでくれる?」と言うと、全員で名前を呼ぶようになり、子どもたち一人一人が友だちに自分の名前を呼んでもらい、自分の考えを話すようになった。子どもたちは話題について自分の考えを話したり友達の話を聞くことを楽しみ、共感したことをつぶやいたり、友だちについて知っていることを口にする姿も増えていった(表3②)。

表3 健康観察時に日直が決めた話題について話す

① 5月30日(水) 「大きくなったら何になりたい?」	a子(一人目):Sに名前を呼ばれ、「はい元気です」 b子「大きくなったら、何になりたいですか?」 a子「(おどけた感じで)かたつわりになりたいです」 S「わけが言えますか?」 a子「なぜかと言うと、かわいいからです」 S:その後の子どもにも理由も聞いてみる。 (例)c子「お花屋さんとケーキ屋さんです」 S「わけがある?」 c子「お花さんは、お花がすきだからです」 S「ケーキさんは?」 c子「**できるからです」 S「へえー」 (注: **は聞き取れなかった部分)
② 6月12日(火) 「すきな本」	S「健康観察を始めます。お当番、何を話しますか?」 b子「すきな本」 P男「いいね」 Q男「いい」 一人一人元気かどうか返事をした後、話題についても話す。 (例)A男「すきな本は、コナンです」 ・「やっぱり」 ・「おお」 S「ふーん。やっぱり。知ってたの」 ・「うん」 ・「だって、いつもコナン借りてるもん」 S「そうなの」 (次の子どもの名前を呼ぶ子どもが多いのを見て) S「お友だちの名前、誰か呼んでくれてるけど、先生じゃなくて、みんなで呼んでくれる?どうぞ」 その後、次の子どもの名前を全員で呼んでいく。

3-3 【Ⅱ期】 クイズトーク

7月には「クイズトーク」を開始した。この活動は「1、2年生には、話し合い活動だけに集中することは困難」であるために桂(2006)が考案した「具体物を使ったりクイズの要素を取り入れたりする」「フリートークの低学年版」である⁴⁾。Sは桂(2006)を参考に、クイズトークを以下のように進めていった。

- 「宝物」を持って来た子どもが考えてきた3つのヒントを出す。
いずれも「質問タイム」を1分とり、その中で他児が質問しながら「宝物」は何かあてる。
- 「宝物」を持って来た子どもがその宝物(または写真)見せながら紹介し、その理由も話す。
友達の質問にも答える。

この活動は、国語の「たからものをおしえよう」とも関連し、附属幼稚園で自分が作ったり見つけたりし

たものの「紹介」を楽しんできた子どもたちにとっては、幼稚園での経験をいかせる活動でもあった。

3-3-1 事前の準備

Sが自分の「宝物」を持って来てクイズトークをしてモデルを見せた後、家庭でクイズトークの準備をしてくることを説明し、「ひんと①」「ひんと②」「ひんと③」を考えて書いてくる事前学習プリントを配布した。保護者にもクラスだよりで事前学習への協力を依頼した。

【クラスだよりから（一部）】

「具体物や友達とのやりとりを通して、話す内容を膨らませ、それを話す力をつけることがねらいです」
「宝物の条件は『エピソード（思い出）がこもっている物』です」

3-3-2 クイズトークの実際

1回に3名ずつクイズトークを行なった。子どもたちが持って来た「宝物」とその理由の一部を表4にまとめた。「宝物」で最も多かったのは、親や親せきに買ってもらったぬいぐるみ(6名)であった。きょうだい、飼っていた生き物、習い事で頑張ってもらった賞状やオブジェもそれぞれ2名いた。

表4 クイズトークのために子どもたちが用意してきた「宝物」（一部）

日にち	子ども	宝物とその理由
7月4日(水)	a子	タオル：「フカフカやし、いつもこれは枕にして寝るから」 (表5-1)
7月11日(水)	k子	弟(写真)：「アイスクリームを食べる姿からかわいいから」 (表5-2)
	l子	犬のぬいぐるみ：「おばさんから2歳の誕生日にもらったから」
7月17日(火)	L男	附属幼稚園で撮った集合写真：「やっぱり自分にとっても友だちが宝物なので」
7月18日(水)	M男	カワムツ(写真)：「4歳の時にお父さんと捕まえて、大切に、育てて」 (表5-3)

第1回は国語の授業の中で行なった。Sはクイズトークの流れを板書して確認し、「話し方、聞き方をお勉強してください」と伝えて始めた。しかし、一人目のクイズトークでは、子どもたちがヒントを聞いて自分が「正解」だと思ったものを次々に「〇〇ですか?」と聞き続け、時間切れになってしまった(表5-1)。Sは「見つけないと。みんなの力で」「質問して聞き出さないと」と子どもたちに伝えていた。

表5-1 クイズトーク(1) 7月4日(水)「見つけないと。みんなの力で」

1人目のクイズトーク	<p>a子：事前学習プリントを見ながら話す。 (「ヒント1、毎日使うものです」「ヒント2、寝る時に使います」「ヒント3、やわらかいものです」) 子どもたち「それは〇〇(正解と考えたもの)ですか?」という質問が多い。 (どのヒントの後も1分が過ぎ、タイマーが鳴る)</p> <p>S「もう1分あげます」 子どもたち：質問するが、正解がわからない。(1分たち、タイマーが鳴る)</p> <p>S「もう1回いきます。見つけないと。みんなの力で」「質問して聞きださないと。どんどん聞いてごらん」 子どもたち：質問するが、やはり正解がわからない。(1分たち、タイマーが鳴る)</p> <p>a子「あたしの宝物は、タオルです。どうしてかと言うと、フカフカやし、いつもこれは枕にして寝るからです」 子どもたち「えー!」</p> <p>S「枕って言った人、近かったね」</p>
------------	--

クイズトークの中では「トラブルをチャンスに」する出来事も起きた。Sはそこでも子どもたちが自分たちで考えることを大切にしていた。例えば、始める前に「正解」を言われた子どもが号泣してクイズトークができなくなった時には、Sは具体的な助言はせずにこの時期子どもたちが楽しんでいた「紹介」の時間を設けるようにした。この「紹介」は当初は附属幼稚園でこの活動を楽しんだ経験がある子どもが中心となっていたが、この時期になると他の子どもたちも前に出て加わるようになっていた。その中で、号泣した子どもも気持ちを立て直し、再開したクイズトークでは、子どもたちは「正解」を知らないふりをして様々な質問をしてクイズトークを終えていた(表5-2)。この姿を見て、Sは「クラスの仲間づくりができてきた」

ととらえていた。

大事に育てていた「宝物」の魚がクイズトーク直前に死んでしまったことを聞いて驚いた子どもたちが、その子どもに「宝物」の魚について次々に質問して知ろうとすることもあった(表5-3)。この子どもた

表5-2 クイズトーク(2) 7月11日(水)「できてよかったね」

クイズ トークを 始める前	<p>k子がクイズトークを始める前に、a子が「わかっちゃったかも」「〇君(k子の弟)」と言う。</p> <p>k子は「なんで言うん。正解じゃん!」と言い、号泣し始める。a子も泣いてしまう。</p> <p>S「aちゃんも困ってるの、わかる?」 子どもたち「わかるよ」</p> <p>S「なんかさー、言ってしまったー、やってしまったーってこと、あるよね」</p> <p>1子「人間にはあるよ」 h子「だから失敗は」 F男「失敗はもと!」</p> <p>S「失敗は」 P男「成功のもと」「だからトラちゃん」 F男「まだチャンスある!」</p> <p>S「うん。今aちゃんは、あーいけんかったー、やってしまったーって思っとるよね」</p> <p>「もし、答え知ってても、言ってしまったら、こんなに悲しい思いをする人が」 子どもたち「いる!」</p> <p>S「いるってことやから、これからみんなも気をつげんにやいけんね」</p>
「紹介」 をする	<p>S:k子が号泣し続けるので、フリートークはやめ、1時間目に「紹介」の時間をとる。</p> <p>〔子どもたちは大勢前に出て、校庭で見つけた虫、家で育てた花を見せて話をしたり、家で調べてきたことを書いた紙を読み上げたりする。k子も泣きやみ、途中から自分も前に出て発言したりする。〕</p> <p>S(k子が気持ちを立て直したのを確認して)「kちゃんのニコニコが戻ったよ」</p> <p>子どもたち「よかったー」 b子「忘れちゃったもん」 k子「覚えてるんだったらやらない」</p> <p>S「忘れたよー(って人)?」 子どもたち:多くが手を挙げる</p> <p>S「みんな素敵…」 k子「覚えてる人ー」 子どもたち:数名が手を挙げる D男「じゃあ、言わんとき」</p> <p>S「やりたくなかった?」 k子:うなずく。 p子「よかったー」</p> <p>S「1回休憩して、それからもう1回スタート」 子どもたち「やったー!」</p> <p>[休憩時間:Sはa子呼び、a子はk子に謝る。周りに集まって見ていた子どもたちも、安心した表情を見せる。]</p>
クイズ トーク	<p>k子のクイズトークを始める。子どもたち:「正解」を知らない前提で考えた質問をする。</p> <p>(例)「その子は何歳ですか?」「それは人ですか?」「その子は、kちゃんの妹ですか?」等 (タイマーが鳴る)</p> <p>k子「正解は、私の宝物は」弟の写真を見せる。 子どもたち:「あー、かわいい」「〇君かわいい」</p> <p>k子が理由も話し、質問にも答えてクイズトークを終える。</p>
クイズ トークを 終えて	<p>S「kちゃんに聞いてみます。やってよかったですか?」 k子「えーっと、えーっと…」</p> <p>S「今はわかんないんだって」 L男「わかんないけど、できてよかったね」</p>

表5-3 クイズトーク(3) 7月18日(水)「悲しいけれど、宝物です」

「宝物」 である理 由を話す	<p>M男(二人目):最後に自分の「宝物」(カワムツ)の写真を見せて話をします。</p> <p>「どうして宝物かと言うと」「13日(5日前)の金曜日に死んでしまいました」 子どもたち「え!」</p> <p>M男「4歳の時にお父さんと捕まえて、大切に、育てて、悲しいけれど、宝物です」</p> <p>b子「かわいそう…」 D男「M君、泣きそうになってる…」 等々 つぶやく</p>
「宝物」 について 質問する	<p>M男「質問はありますか?」</p> <p>b子「それは、どんな沢で見つけましたか?」</p> <p>M男「えーっと、附属幼稚園の時、遠足で行った、沢遊びで…」</p> <p>子どもたち「ああ」「おお、あそこ」「あのさ、木戸公園の」 子どもたち:その後も次々に質問する。</p> <p>M男「これで、クイズトークを終わります」 子どもたち:拍手する</p> <p>S「拍手がいっぱい起こるのは、なんでかなー」</p>
クイズ トークを 終えて	<p>(3人のクイズトークが終わった後)</p> <p>S「宝物って大事なお話が入ってるんよね」「思いついてわかる?」 D男「思い出」</p> <p>S「思い出がすごくあるから、M君、涙ぐんだよね。あのぐらい大事っていうのは、みんな伝わったやろ」</p> <p>子どもたち「うん」</p> <p>S「その思いが伝わるっていうのは、とっても素敵だな今日は思いました」</p> <p>「面白かったなっていう質問を言ってみますね」「どんなって聞いていたら、実はわかっていくんだよね」</p> <p>「この仲間ですかっていう聞き方もあるなと思いました」</p>

表5-4 クイズトーク（4）7月20日（金）クイズトークの最後の日

クイズ トークを 終えて	S「お友だちのことをもっとよくわかった」「こんなものが宝物って素敵」「そんなことがみんなで思えたらいいな」 「みんなのことが今までよりもまだわかった、もっと仲良くなれる、そのためにクイズトークしたんだよ」 子どもたち「うん」 S「まだまだ、仲良くなっていくために、いっぱいお話をみんなでしたいの」「1組さんがやってたフリートーク」 「そんなのも面白いかな」 D男「あ、それがいい」 P男「そうだねー」
--------------------	--

ちの姿を見て、Sは「宝物」を紹介する子どもの言葉や表情に「思い」が表れていること、その「思い」が「伝わる」ことが「素敵」なこと、聞き方を工夫すると「宝物」が「わかっていく」こと等について、子どもたちに伝わる言葉で丁寧に確認していた。このように、子どもたちは友だちの「宝物」を知りたいという強い思いから、どのような質問をするとよいのかを少しずつ理解していった。さらに、質問にどのように答えるるとよいか困っている友だちに「手で表したら？」「絵に描けばいい」等、「どのようにすると相手に伝わるか」アドバイスする発言も出てくるようになった。

クイズトーク最終日には、Sは子どもたちとこれまでのクイズトークについて振り返り、「まだまだ仲良くなっていくために」フリートークを試みることを提案した。数日前に隣のクラスの朝の会参観でフリートークに興味をもっていたことから、子どもたちからもやってみようという声があがっていた（表5-4）。

3-4 【Ⅲ期】フリートーク

3-4-1 教師が話題提供をしたフリートーク

夏休み明けの8月下旬から、従来の形でのフリートークを開始した。次のように進められた。

- 話題提供者が自分の考えた話題を話し、自分の考えも話す（ホワイトボードにも書いて掲示）。
- 他児が話題について自分の考えを話す（5分）。
- 話題提供者が話を聞いて思ったこと等を話す。
- 他児も自分の思ったこと等を話す（5分）。

クイズトークと同様に、最初にSが話題提供者になって子どもたちにモデルを示した（表6-1）。子どもたちは入学当初から話題についての自分の考えを話したり友達の話聞く楽しさを経験し、フリートーク参観も経験していたため、進め方もすぐに理解していた。この日はほとんどの子どもが話をした。

表6-1 8月30日（木）初めてのフリートーク（1）

進め方の 確認	S「今日のお題はS先生が出します」ホワイトボードに「なつとふゆ」と書く。 子どもたち「あ、どっちがすきですか？」「やったー！」 S「今日のお題は、夏と冬どっちがすきですか」「どっちか決めて」「どっちがいいって言うんですが」 H男「わけを言うの？」 S「うん、わけも。今から先生言っている？」 H男：うなずく S「S先生は、夏がすきです。どうしてかと言うと」 子どもたち「楽しいから」「誕生日やから」 S「誕生日。夏生まれだから」 k子「あ、私も」 S「どっちがすきかなって聞いてみたいので、今日話したいと思います」 子どもたち：口々に話し始める。 S「5分で今からどんどん話してあてていきたいと思います」
初めての フリー トーク	【子どもたちの発言（一部）】 ・「私は夏がすきです。どうしてかと言うと、海やプールに行けるからです」 ・「ぼくは夏がすきです。どうしてかと言うと、セミとかが捕まえられるからです」 ・「私は冬がすきです。どうしてかと言うと、冬は冷たいし、雪で遊べるからです」 (5分が過ぎ、タイマーが鳴る) 子どもたち「えー！」 S「22人も」「5分の間でしゃべった」「しゃべれなかった人、どのくらいいる？」 子どもたち：数名挙手する。 S「初めてやけん、言わせてあげよう」 子どもたち：さらに10名が話す。 S「フリートークをした後」「お題を出した人が、もう1回みんなの話を聞いて思ったことを言います」 S「フリートークをして、どんなことを思いましたか？」 【子どもたちの発言（一部）】 ・「初めてやったけど」「面白いし」「まだ、何回もやりたい」 ・「最初はドキドキしたんですが、でも、できると思ってやったら、できました」 ・「みんなのことをたくさん知れて、みんなともっと仲良くなれそう」

表6-2 8月30日(木)初めてのフリートーク(2)

どのような話題にするか	S「自分だったら、どんな題出す?」「考えてみた人いる?」子どもたち「考えてない」「ある」「今考え中」 S「自分の番が来るまで」「考えておいてください」 S「どうやったら先生に、みんなが聞いてるってわかるんだろうね」 【子どもたちの発言(一部)】・「話している人の、顔とかを、よく見てくれたら」・「姿勢をよくする」 ・「耳をすます」・「体を向ける」・「心も向けんにゃあ」
どのように聞くか	S 子どもたちの発言を聞きながら板書していく(写真3)。 「自分でもね、(板書した)こんなことをやってみて」「話しやすいようにね、手伝ってあげてくれる?」 「話し方、とても上手でした。次は聞き方です。頑張ってください」

表7 フリートークの「話題」(一部)

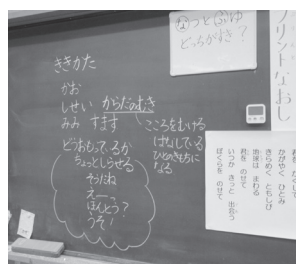


写真3 「ききかた」

日にち	子ども	話題
8月31日(金)	a子	ねこといぬ、どっちがすきですか
9月5日(水)	b子	もしも、すきなものがかえるなら、なにがいい
9月7日(金)	B男	なんのえいがが すきですか
9月13日(木)	f子	ようちえんとしょうがっこう どっちがすきですか? (表8-1)
10月18日(木)	n子	じぶんがやったーとおもうときは いつですか
1月16日(水)	H男	どんないえにすみたいですか(のりものでもいいです) (表8-2①)
2月22日(金)	B男	すきががきは、なんですか(表8-2②)
3月19日(火)	k子	もしドラえものどうぐがつかえるなら、なにがいいですか(表8-3)

このフリートークの後、Sは子どもたちにどのような話題にするか考えておくように伝え、「ききかた」についても子どもたちの考えを板書して整理しながら確認していった(表6-2)(写真3)。

3-4-2 フリートークの実際

子どもたちが考えた話題の一部を表7にまとめた。当初はSの話題にならって「○と○、どっちがすきですか」が多かったが、次第に「もし○○だったら～」や「何の○○がすきですか?」という話題も出てきた。子どもたちは3月まで順に話題提供者となり、約半数の子どもが3回、約半数の子どもが2回担当した。

フリートークが始まって間もない9月には、「ようちえんとしょうがっこう どっちがすきですか?」という話題でのフリートークがあった(表8-1)。ここでの子どもたちの発言には、一人一人が「幼稚園」と「小

表8-1 フリートーク(1) 9月13日(木)「ようちえんとしょうがっこう どっちがすきですか」

フリートーク	f子:フリートークの話題を書いたホワイトボードを黒板にはる。「今からフリートークを始めます」 「今日のお題は、幼稚園と小学校、どっちがすきですか。私は幼稚園です。どうしてかと言うと、楽しいからです」 【子どもたちの発言(一部)】 ・「小学校」「体育のお勉強がすきだから」・「幼稚園」「みんなで弁当を食べたりできるから」 ・「学校」「友達がいっぱいいるから」・「小学校」「工夫ができて、くわしくなれるから」 ・「幼稚園」「鞆とかマフラーを、毛糸で作れるから」・「小学校」「学校にいられる時間が長いから」 f子「幼稚園と小学校が」「半分ずつかと思ったけど」「幼稚園の方が多かったので、びっくりしました」
フリートークを終えて	S「教えてみました」「幼稚園って言った人、8人」 子どもたち「え?」 S「小学校って言った人、9人いたんです」 子どもたち「え?」 S「実はfさん、予想通りでした」 S「H君が」「いいこと言うなあって」「何人かの人がそうなんって」「人のお話をよく聞いて、どんなことを思ってるか」「周りの人に伝わる」「話す人が」「いい気持ちになる」「そういうのが話を聞く時に大事だなと思いました」 「H君どんどんやってみてください」 H男:うなずく S「L君が」「お題について(自分の考えを)言いました。それもよかったです。初めて言ったよね」 L男:うなずく S「時計を見て下さい。ちゃんと終わりましたよ」 Q男「1分すぎちゃったけどね」

表 8-2 フリートーク (2)

① 1月16日(水) 「どんないえにすみたいですか」	G男「ぼくは二階建ての家がいいです。どうしてかと言うと」「おばあちゃんちも二階建てだし、二階建てがすきだからです」 A男「G男君のお家は二階建てじゃないん？」とつぶやく 子どもたち「ハイ！」 S「(A男に) あ、それを言ったらいいんだよ。質問がありますって言って」 A男「質問があります」 S「A男君が先に言って」「G男君に質問がありますって言ったら、話がつながるかも」 A男「G男君は二階建てじゃないんですか？」 G男「はい、マンションです」 q子「ああ、マンション」 S「そうそうそう、そういうふうに、言った人におたずねしてもいいです」
② 2月22日(金) 「すきなグッズは、なんですか」 フリートーク後の振り返り	j子「今日はよかったことが二つあったんですけど、一つ目は、今日は静かにしてたので、よかったなと思いました。二つ目は、B男さんがすぐにあてた人が言い終わったら、すぐあてていたのでよかったなと思いました」 d子も「j子さんと同じで、今日静かにしてたのでよかったです」「もう一つはj子さんとすごく似ているんですけど、すぐあててたし」「女の子、男の子とか、男の子、女の子ってあててたので、すごかったです」 S「そんなこと考えてたの？B男君」 B男「うなづく」 S「ふーん、伝わってるんだね」 S「長らく話す人が出て来て、例えばbさん」「私も習っているけど、けどってまだ続くんだよ」b子の話を紹介する。「それと反対で、短すぎるんじゃないかなというのをちょっと紹介します。例えば、ラッパはきれいだからです。何がきれいなのかなって先生は思ったんですが」「思った人いましたか？」 子どもたち:数名手を挙げる。 S「きれいって何?形?色?」 H男「音がきれい」 S「そうなんだよ。音がきれいって言ったらいいんだよ」 S「というふうだね、少し長く説明できるといいかなと思ってます」 「久しぶりのフリートークでしたが、どうでしたか？」 I子「おもしろかった」 a子「たのしー！」 S「楽器っていうのは初めて聞いたので、おもしろかったです」

学校」の生活をどのようにとらえているのかが表れていた。このフリートークの後にも、Sは子どもたちの発言をもとに「話す人が」「いい気持ちになる」聞き方について確認していた。この頃には、予定されている朝の会の終了時刻に終わることができるようになってきていた。

その後、フリートークの中でわからないことをつぶやく子どもにSが「質問してごらん」と促したことから、「質問」がある人が先に発言することになり(表8-2①)、質問後にそのまま話した方がよい時とそうでない時についても確認していった。話題提供者の気持ちや考えを理解した上で、進め方について発言する子どもも増えていった(表8-2②)。

最後のフリートークの話題は、「もしドラえもののどうぐがつかえるなら、なにがいいですか」(写真4)で、多くの子どもたちが発言した。しかし、質問して「だめ」と言われた理由がわからないままの子どももいた(表8-3)。そのため、Sはここでも最後に「悲しそうな人がいます。誰でしょう?」と問いかけ、「悲しくならないように」どのように伝えるとよかったかを話し合う場を設けていた(表8-4)。

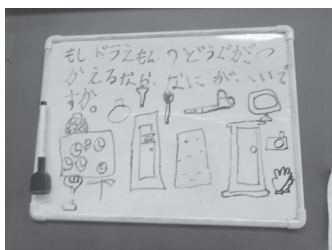


写真4 最後のフリートークの話題

表 8-3 フリートーク (3) 3月19日(火) 「もしドラえもののどうぐがつかえるなら、なにがいいですか」①

フリートーク	k子「今日のお題は『もしドラえもののどうぐがつかえるなら、なにがいいですか』です。私はタケコブターがいいです。どうしてかと言うと、空をとべるからです」 A男「質問」「ドラえもんでもいいですか？」 k子「いいです」 A男「ぼくはドラえもんがいいです。どうしてか言う、いっぱい道具を持ってるし、ネコ型ロボットだし、何でもできるからです」 子どもたちは「ハイハイ」と手を挙げ、k子にあててもらって話していく。 a子は「ジャイアンでもいいですか?」と質問するが、k子に「だめです」と言われ、何も言えないまま座る。
--------	--

表 8-4 フリートーク (3) 3月 19日 (火) 「もしドラえもののどうぐがつかえるなら、なにがいいですか」②

フリー トークを 終えて	<p>S「なんか最後にふさわしい、すごい楽しそうなフリートークでした。でも、悲しそうな人がいます。誰でしょう？」</p> <p>子どもたち：口々に話す。 k子「a子ちゃん」</p> <p>S「a子ちゃん、悲しかったねえ」 a子：うなずく。</p> <p>S「目に涙浮かべてたねえ。じゃあ、なんでaちゃんは悲しかったんでしょう？」 A男「あ、だめだめって言われた」</p> <p>S「だめだめって言われたよね」「そりゃだめだろうって思った人、手を挙げて」</p> <p>A男「道具じゃないもん」手を挙げて k子「ジャイアン、道具じゃないもん」 子どもたち：自分の考えを話す。</p> <p>S「はい。いっぺんに話すのやめてね。(Sに話しかけているL男に気づき) L君、ちょっと言ってみて」</p> <p>L男「なのに、どうしてドラえもんはいいの？」</p> <p>A男「先生、あのね、ネコ型ロボットやから」 I男「ドラえもんも、人間から発明されてる」</p> <p>S「理由はあったんだけど、悲しい人がいる。そういう時にどうやって悲しくないようにすればいいんだろう？」</p> <p>S「いいよはいいの？」 A男「それはだめ」 I子「強く言いすぎたんじゃない？」 e子「ダメダメも違う」</p> <p>I男「ダメを1回ぐらいにしたらいい」 A男「道具じゃないからダメ」 I子「理由を言ってから」</p> <p>S「そう。わけ(理由)がわかんなかったんだよ。a子ちゃん」 a子：洋服の袖で涙をぬぐいながらうなずく。</p> <p>k子「でも、(ホワイトボードには) どうぐって書いてある」</p> <p>S「それが、ダメだけじゃ伝わらなかったんだよ」「だから、他の人がそういう時に」「助けてあげるんだよ」「多分a子ちゃんはこういう気持ちだったんじゃないかと思えますとか」「a子ちゃんこうなんだよと教えてあげるとか」「せつかくの楽しいフリートークが、悲しい人がいたら」 e子「台無しになる」 b子「台無し」</p> <p>S「ただ、それをk子ちゃんだけに任せるのは難しかったから、他の人がわかったら助けてあげたらよかったかなと思いました」</p>
--------------------	--

3-5 他大学附属小学校の参観

2月には奈良女子大学附属小学校学習研究発表会に参加し、1年生の朝の会と学習を参観し、協議にも参加した。1年担任の薄田太一先生からは、朝の会について以下のようなお話があった。

- ・教師よりも子ども同士で受ける影響が強い。「よこのつながり」が大事。
 - ・特に1年生の4・5月は「よこのつながり」を強くしていくアプローチで、「あったかい空気」をつくる。
 - ・そのために一番大事なのは朝の会(自分の思いを安心して話す。それを聞いてくれる仲間がいる)
 - ・子どもは話し合いたいことがあるから話すのであり、学友から学びたいから意見を言い、学友の考えも真剣に聞く。
 - ・クラスの一員として、問題解決のために自分が何ができるか。
追求していく課題について、どのように貢献できるか。
 - ・教師は「子どもの事実」があったところで、その場で指導していく。
- (例)朝の会で子どもが発言した時、「今、何て言った?」「そういうふうな考え方ができたね」

このような子ども理解や教師としての願いのもち方や支援についての考え方はSと共通する点が多く、幼児期からの発達と学びの連続性をふまえ、1年担任として子ども主体の学習を追求すると、教師の役割として重視することは共通してくることを確認できた。

3-6 附属幼稚園教諭との討議

3月には、附属幼稚園教諭と映像記録を一緒に視聴しながら討議を行なった。映像記録は7月11日朝の会の健康観察とフリートーク(表5-2)、3月19日朝の会のフリートーク(表8-3、表8-4)を取り上げた。附属幼稚園教諭からは、7月11日健康観察で子どもたちが友だちの方へ顔を向けて名前を呼ぶ姿からも友だちへの関心の強さがよくわかること、3月19日フリートークでSが「悲しい人がいること」について問いかけたが、このようなことに子どもが気づいたりわかったりするのための教師の支援が大切であること等の指摘があった。また、幼稚園とは違う小学校生活での仲間づくりの背景として、一日をクラス全員で過ごす生活の中で様々な活動に取り組むこと、多様な友達関係の中で様々な立場を経験できるだけの人数がいること等が挙げられた。

4. 総合考察

これまで取り上げた実践からわかるように、Sは子どもたちの実態についての理解とそれまでの学習経験もふまえた願いをもとに、朝の会での話し合いの場をつくっていた。また、子どもたちの具体的な言動から支援のタイミングを判断していた。入学当初から従来の形でのフリートークを取り入れるのではなく、まずは一人一人の名前を呼び、子どもが答えていく健康観察の場面で話題について全員が話をする場を設け、「自分の存在を友達に知らせる」「いろいろな友達の存在を知る」ことで互いに知り合い仲良くなれるように、「自分の生活を振り返って話題を探す」「二人で一つの話題を決める(友達と思いを合わせる)」「話題によって面白さが違うことを体感する」経験ができるようにしていた。また、「理由を聞くと、友達のことがもっとよくわかる」ことも経験できるようにしていた。このようにして仲間づくりの基礎ができてきた頃に、自分の思いが込められた「宝物」について友だちに伝えたい、友だちの思いが込められた「宝物」について知りたいという子どもたちの気持ちを大切にしながらクイズトークを実践していった。Sはクイズトークの時間以外に「紹介」の時間も設けるようにしており、子どもたちは友だちに伝えたいことが生まれると、そのために自分で準備してきて友だちの前に出て話すという経験もしていた(表5-2参照)。このような経験は、特に附属幼稚園から入学した子どもたちにとっては、幼児期に楽しんできた経験をいかせるものでもあった。

Sは入学当初から困ったことが起きて子どもたちが「トラブルをチャンスに」できるようにも支援していた。また、「幼小接続期は入学後1学期いっぱい(夏休み前まで)くらいまで」と考えていたが、子どもたちの姿から「クラスの仲間づくりができてきた」とSがとらえたのも、7月中旬になってのことだった(表5-2参照)。このようなSの子ども理解、教師としての願いのもち方、支援のあり方は、附属幼稚園での保育経験がいかされていると考えられた。そして実際にS自身も、以前は今のようには子どもが見えておらず、幼稚園の保育を経験し、そこで子ども一人一人を見ていくこと、個をつないで集団をつくっていく経験をしたことが、小学校に戻ってからの自分の強みになっていると語っていた。

おわりに

附属山口小学校は現在文部科学省研究開発学校の指定を受け、『価値の創出と受容・評価をコアにした教科融合カリキュラムに関する研究開発～「創る科」の創設を通して～』に取り組んでいる。フリートークはその中でも重視されており⁵⁾、「発達段階や学年に応じたフリートークの持ち方、意味づけが必要」⁶⁾とされている。今回は紙幅の都合から実践の一部しか取り上げられなかったが、フリートークの内容については今後さらに詳細に分析していきたい。また、次年度も引き続き1年生のクラスでのフリートークの実践について検討し、附属幼稚園と附属山口小学校の幼小接続のあり方や、入学当初の1年生にふさわしいフリートークの持ち方、意味づけを考えるための根拠を提供できるようにしていきたい。

引用文献

- 1) 奈須正裕監修 山口大学教育学部附属山口小学校：学びの実感がある授業をつくる～附属山口小学校の授業とフリートークの取り組み～，学校図書，p.172，2012.
- 2) 中島寿子・大森洋子：保育者は「帰りの集まり」をどのように構想するのか，山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，42，pp.89-98，2016.
- 3) 中島寿子：帰りの集まりで子どもが「お話したいこと」を保育者はどのように支えているか～ある4歳児クラスの事例をもとに～，日本保育学会第72回大会発表論文集，pp.257-258，2019.
- 4) 桂聖：クイズトーク・フリートークで育つ話し合う力，学事出版，p.46，2006.
- 5) 山口大学教育学部附属山口小学校平成30年度研究開発実施報告書(第1年次)価値の創出と受容・評価をコアにした教科融合カリキュラムに関する研究開発～「創る科」の創設を通して～，pp.6-7，2019.
- 6) 同上 p.25.